

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02804

研究課題名(和文) 国際英語論に基づくアプローチの有効性 英語学習者の心的障壁克服の実証

研究課題名(英文) Does World Englishes help English learners lower affective filter? -An empirical study

研究代表者

塩澤 正 (SHIOZAWA, Tadashi)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：10226095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：この研究の目的は「国際英語論」という新しい世界諸英語を寛容的に受け入れるという考え方が日本の英語学習者たちの言語学習に対する「不安」の克服に有効であることを実証的に調査・提示することである。国際英語論の理論的枠組みを日本の英語教育の現場に合わせて再構築し、応用法を具体的に提示し、データに基づきながらその有効性を実証的に示してきた。成果はアメリカのIAWE国際大会で発表した3件の報告と大学英語教育学会国際大会や同支部大会で報告したいくつかの発表に集約される。国際英語論に基づくアプローチは、英語学習者の心的障壁克服に繋がるという一定の結論を得た。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is to find out if numerous contacts with a variety of English, i.e world Englishes in fact reduce the anxiety of learners of English in Japan or lower their wall of affective filters. If so, does that increase the amount of input, output, and interaction, which eventually leads to the development of higher English proficiency? To seek the answers to the above questions, we conducted a series of studies over three years. One of them is to find out if those who studied overseas with a large number of contacts with a variety of English speakers become more comfortable with different English accents including their own, which increases the confidence in using the language. We did find out that they become more confident with their own variety of English and less anxious about speaking English. We also developed some teaching materials with World Englishes in mind. Finally we proposed a model of World English from a pedagogical point of view.

研究分野：言語習得論

キーワード：world Englishes ELF affective filter anxiety 国際英語論 心的障壁

### 1. 研究開始当初の背景

本研究グループは、「国際英語論」の視点から日本人英語の音韻・語彙・統語上の特徴、日本人の英語コミュニケーションスタイルの特徴、日本人英語の国際通用度の問題、グローバル化に関する研究やアジア英語の研究、国際英語と英語教育の関係に関する研究などに長年携わってきた。その成果は毎年欠かさず、WE 世界大会、JACET 国際大会などで発表してきた。関係論文は合計で約20編、著書(編、著、部分執筆)数冊となった。2013年には、『現代社会と英語—英語の多様性をみつめて—』を上梓した。本研究は、これらの研究成果に基づき「国際英語論の視点から日本人の英語を考える」という本研究グループがこれまでに取組んできた研究テーマを発展させたものであり、国際英語論が英語学習者に与える教育効果の検証と教材開発に焦点をあてた応用である。

### 2. 研究の目的

日本の英語教育現場では、母語話者英語偏重の姿勢が顕著であり、国際英語論を英語教育に応用することへの懐疑的見解も根強く存在している。本研究は、国際英語論を単なる言語観として受け止めるのではなく、言語認識が言語学習にも影響するという仮定のもと、国際英語論を英語学習に取り入れる意義を考察し、具体的な方法を提案・実践するとともに、国際英語論の導入によって英語学習にどのような教育効果を与えうるかの調査・研究・提案を意図するものである。すなわち、本研究は、国際英語論という社会言語学的な視点の英語教育への応用研究とその成果としての教材開発という位置づけを持っている。

英語を習得する上で「緊張民族日本人」が抱える大きな心的障壁の一つが、「言語不安」や「情意フィルター」の働きである。日本人英語学習者のWTC(コミュニケーションを取ろうとする意志)が極端に低い背景には「言

語自我」を守ろうとする心的防衛反応の根深さが存在している。この心的障壁を飛躍的に低くする可能性があるのが国際英語論の考え方である。

本研究の目的は「自分の英語」を肯定する国際英語論的な学習アプローチが日本人英語学習者の「言語不安」の克服に有効性をもつことを実証的に調査検証することにある。「国際英語論」の理論的枠組みを日本の教育現場に合わせて再構築し、応用方法を具体的に提示し、その有効性を実証的に示す。最終的には教材として提示したい。

### 3. 研究の方法

上記の目的を達成するためにいくつかの研究を計画した。それは、(1) 国際英語論の知識が「多様な英語」への受容性や母語話者英語への態度に影響を持つことの検証、(2) 国際英語論の視点を日本の英語教育に応用する意義についての研究、(3) 国際英語論を背景にした情意要因を刺激する言語活動と教材の開発である。また、必要に応じて派生的な研究も行うこととした。最後に、(4) 教材作成とその基盤となる国際英語論を教育の側面から見たモデルの構築を考えた。

(1) については、多文化共生・英語学習・英語の多様性に関する複数の大学での意識調査で明らかにしようと試みた。仮説として海外渡航体験や外国人との接触体験の多さと多文化共生への受容性には相関性がある、多文化共生への肯定感と英語学習への意欲には相関性がある、国際英語論の知識が「多様な英語」への受容性や母語話者英語への態度に影響を持つ、の3つを立て、質問紙調査をした。(2) については、本研究グループの10年間の研究結果を整理分類する方で達成できると考え、今までの研究を整理した。(3) は、国際英語論の視点からの英語教育の導入が学習者心理と英語技能の両面において与える教育効果の測定を複数の実験クラスと

統制群を利用しながらデータで証明を試みた。(4)については多くの国際英語論の視点に立った言語活動や教材を作成し、それを運用しながら(3)と同時並行して効果の検証を行うこととした。モデル構築は研究代表者が試案を出し、研究分担者らと検討した。

#### 4. 研究成果

いくつかの研究はまだ継続中だが、成果が出たものも少なくない。

(1)の研究については、T検定や因子分析などを通して、(1) 国際英語論の知識は「母語話者英語への憧れ」の完全な脱却には至らないものの、「英語学習意欲」「自分の英語への自信」には結びついている、(2) 海外渡航体験は「多文化共生意識」「英語学習意欲」「英語への自信」を高める、などの結果を得た。国際英語論の知識が「多様な英語」への受容性や母語話者英語への態度に影響を持つことが確認された。

(2) 国際英語論の視点を日本の英語教育に応用する意義についての研究と、(3)の国際英語論の視点からの英語教育の導入が学習者心理と英語技能の両面において与える教育効果の研究においては、積極的態度の養成、それに伴うインターアクションの増加、自分の英語の肯定、ネイティブ英語からの解放、などがあげられた。これらに伴う心的障壁の解消や教育効果についてはまだデータの分析中である。(4)の国際英語論の視点に立った言語活動や教材の開発については、いくつかのストラテジー訓練エクササイズを提案した。また、国際英語論の考え方を全面に押し出した英語教材を一冊出版することができた。

これらの一連の研究から、国際英語論を日本人の英語学習に導入する際に鍵となる概念は *international intelligibility*・*my English*・*affective competence* であることにたどり着いた。一連の研究からわかったこ

とは以下の通りである。「国際的に通用する (*internationally intelligible*) 自分の英語 (*My English*)」を到達目標として設定することにより、学習者自身がある程度、自分にとって「中核的」な学習要素と「周地的」な学習要素を自律的に選択することが容認される。中核部と周辺部の選択が、母語話者の選択と異なることも自然である。例えば'tと'rの発音の違いを「周地的」とみなす選択がありうる一方で、「前置きから始まって、結論を最後にいう」日本的な文章構成を「中核的」とみなす学習者の選択も容認されることとなる。国際的に通じることと自分らしくあることは矛盾しないということを確認させる意義は大きい。

また、日本人学習者が英語学習過程において生み出す誤用の多くは、英語4技能の上達と共に解消されていくものであるが、英語上級者になっても執拗に残る日本人英語の「特徴的要素」は*stabilization*の結果として堂々と受容すべき、とするのが国際英語論の立場である。「母語話者のような英語」ではなく「自分らしい英語」を目標とする学習法は、妥協的姿勢ではなく自然な現実的学習態度であると思われる。英語への認識の変化が日本人の英語4技能の獲得にどのような教育効果を与えるかの予測は容易ではないが、「緊張民族」と揶揄される日本人の英語使用に対する心理的負荷を減少させ、表出活動を積極化させる効果は期待できるのではないかと思われる。また、様々な英語に対する知識・理解・経験を深めることで多様な英語に対する受容性が高まり、コミュニケーションにおける *affective competence* の涵養にも役立つものと予想される。これらがこの研究のまとめである。

この他派生的な研究として、英語エッセイに見られる日本人英語の文法特徴に関する国際英語論的分析を行った。この結果、日本人の英語に他の *Expanding Circle* の英語と

共通する特徴が見られる一方で、日本人英語に特有と思われる特徴なども見られた。具体的には I think の多用や共感表現の多用、曖昧表現の多用などであり、これらを習熟段階でも残る日本人英語の特徴として自覚的肯定的に捉えることにより、英語使用における心的障壁を超えようことを提案した。他にも日本人大学生の異文化理解力について、記述式のアンケート調査を行った。アンケートの目的は、日本人の文化的特徴と言われている時間厳守、年功序列、規則遵守、仕事優先、謙遜、集団主義と異なる言動をする外国人と日本人に対する態度の相違を明らかにし、国際英語論の言語自我との関係を調査しようとしたものである。

そのために、仮説「日本文化で期待されていることとは異なる態度をした場合、日本人大学生は日本人に対するよりも外国人に対する方が寛大である」を立てた。仮説は時間厳守と年功序列において支持された。しかし、規則遵守に関して両者に対して寛大ではなかった。また、謙遜に欠ける人は無視した。仕事優先に関しては両者に寛大であった。その一方、集団主義的行動をすることを両者に期待していた。

これらの結果を日本人が英語を話す時の心的障害、カチュールの英語モデルによる区部に従い調査した結果、インナーサークルの人々と話す時が一番緊張することとの関連を考えると、無条件に妥協しない、文化に優劣はないとの認識を持つことが異文化理解力に繋がり、それは英語を話すときの心的障害を取り除くことにもつながると考えられる、という結論を得た。

最後に国際英語論の考え方を反映した英語学習モデルを提案した。母語話者の英語を目指す中間言語モデルや Kachru の英語の使用地域を元にした三円モデル(1985)と大きく異なる点は、学習者の視点から国際英語論を捉えた点である。

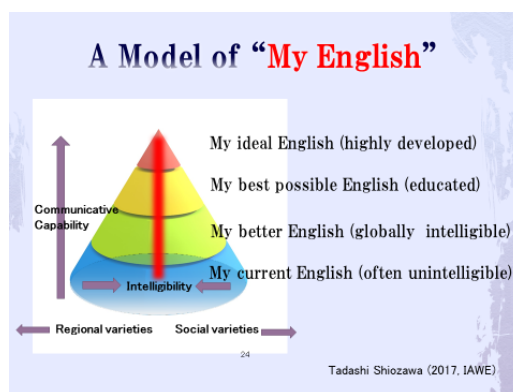


図1 Model of "My English"

このモデルでは、最終到達目標は国際的なコミュニケーションの場で非母語話者として、「自分が理想とする英語話者(My Ideal English Speaker)になることである。下から、My Current English, My Better English, My Best Possible English, My Ideal English と4層になっている。目標は自分が理想とする英語話者になることであるから、学習者個人によって異なってよい。共通する目標があるとすれば、国際的に汎用性が高く、communicative capability (Widowson, 2003)が高い英語使用者を目指すことである。

よって、このモデルでは縦軸にcommunicative capability を取る。母語話者の言語能力を基準とする proficiency や competence ではない点に注目したい。横軸には、social varieties と regional varieties を置いている。3次元の円錐形であるが、これは地域的・社会的な偏りが高い英語を使つての国際的汎用性(intelligibility)を考慮している。中心軸に近いほど、この汎用性(国際的通用性)が高いということになる。現実的には標準的な学習者は My Best Possible English speaker になることを目指すことを念頭に入れている。しかし、高度な論文やビジネス文書などを書くような非常に高いレベルの英語使用者を目指す学習者も考慮し、My Ideal English を頂点に置いている。

学習者や教育者はこのモデルを念頭に置くことにより世界の英語使用の実態に合わ

せた現実的な英語学習・教育ができるのではないだろうか。もとよりこのモデルが複雑な言語習得プロセスを説明するものではないが、英語学習のプロセスを「My English の確立過程」という側面からとらえたという意味で、特別な意義があると考えている。

以上が、この一連の研究で得た現時点での成果であるが、最終的な成果達成までには、またデータの分析結果を待つ必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① Yuta Sugiyama, Tadashi Shiozawa & Greg King (2017)、Applying Dewey's "Experiential Learning" in Progressive Education in ESL/EFL/EIL. *Journal of the College of Humanities*. No.38、pp.13-36. 査読有
- ② 塩澤 正 (2017)、「International Education Week と「国際英語論」」、「Glocal」 pp. 2-3. 査読なし
- ③ 下内 充 (2017)、「国際英語論と小学校英語教育—音声指導と文構造の指導(1)」『東海学院大学研究年報』第3号、(67-72)、査読なし
- ④ 倉橋 洋子、「大学生の異文化に対する態度について」『東海学園大学教育研究紀要』創刊号、2016、(25-32)、査読なし

[学会発表] (計 16 件)

- ① David Laurence、Gregory A. King、Tadashi Shiozawa、Integrating CLIL and CBI into courses at home and abroad JACET 中部支部年次大会、2017
- ② 吉川 寛、倉橋 洋子、石川 有香、国際英語と異文化理解研究会の目的と活動、大学英語教育学会国際大会、2017
- ③ Tadashi Shiozawa、A Model of "My English" as an International Language. IAWЕ、2017
- ④ 倉橋 洋子、「The Intercultural Competence of Japanese University Students」IAWE、2017
- ⑤ 塩澤 正、「国際語の一つとしての“My

English”モデルの提案」大学英語教育学会中部支部春季定例研究会、2017

- ⑥ 小宮 富子、「英語エッセイに見られる日本人英語の文法特徴に関する国際英語論的分析」、大学英語教育学会中部支部春季定例研究会、2017
  - ⑦ 吉川 寛、「国際英語論における『国際英語』に関する示唆」、大学英語教育学会中部支部大会春季定例研究会、2017
  - ⑧ 小宮 富子、吉川 寛、石川有香、「Grammatical and Pragmatic Features of Japanese English: An Analysis of 19 Essays,” IAWЕ、2017
  - ⑨ 小宮 富子、吉川 寛、岡戸浩子、石川有香、榎木蘭鉄也、「多文化共生・英語学習・英語の多様性に関する 8 大学での意識調査」、大学英語教育学会国際大会、2017
  - ⑩ 倉橋 洋子、「グローバル人材育成—日本人大学生の異文化理解力」異文化経営学会、2017
  - ⑪ Tadashi Shiozawa、「Emotions and Environments” -Key Role Players in Global Education and Lang. Learning and Teaching, International Education Week, 2016
  - ⑫ 小宮 富子、吉川 寛、石川有香、「E I L / E L F の視点から見た日本人英語の特徴と課題」、大学英語教育学会国際大会、2015
  - ⑬ 塩澤 正、「英語の授業で異文化理解を促す～異文化理解能力とは、方法は」JACET 関東支部大会、2015
  - ⑭ Tadashi Shiozawa、「What does the diversity of learning and teaching environments entail: A non-native speaker's view?」、JALT CUE Conference、2015
  - ⑮ 小宮 富子、吉川 寛、石川有香、「Japanese English and “Communicacy” of Japanese LFE Users」、The International Conference of English as a Lingua Franca、2015
  - ⑯ 吉川 寛、倉橋洋子、小宮 富子、塩澤 正、下内 充、榎木蘭 鉄也、「国際英語と異文化理解研究会の研究活動」、JACET Sig on World Englishes and Cross-cultural Understanding、第 54 回国際大会、2015
- [図書] (計 8 件)
- ① 吉川 寛、中川 直志 他、「第 3 部 国際英語論と英語教育の接点」、『英語学と英語教育の接点』、中京大学出版、2017、

250、(145-255)

- ② 倉橋 洋子、「日本人の非言語コミュニケーションと行動様式—国際英語論の視点から」、『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』、くろしお出版、2016、221、(173-205)
- ③ 塩澤 正、「今、なぜ国際英語論の視点が必要か」、『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』、くろしお出版、2016、221 (27-80)
- ④ 塩澤 正「国際英語論に基づく英語教育の実践」、『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』、くろしお出版、2016、221、(55-81)
- ⑤ 下内 充「日本人英語の発音、語彙」、『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』、くろしお出版、2016、221、(83-117)
- ⑥ 吉川寛、「日本人の非言語コミュニケーションと行動様式—国際英語論の視点から」と「日本人英語と意味」、『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』、くろしお出版、2016、221、(1-25,155-171)
- ⑦ 倉橋 洋子、**Julyan Nutt**、*Learning Essentials Economics*、英宝社、2016、76、
- ⑧ **Tadashi Shiozawa and Gregory King**、*Global Activator - My English, Your English, World Englishes*、金星堂、2015、91

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

塩澤 正 (SHIOZAWA, Tadashi)  
中部大学・人文学部・教授  
研究者番号：10226095

### (2)研究分担者

吉川 寛 (YOSHIKAWA, Hiroshi)  
中京大学・文化科学研究所・準所員  
研究者番号：90301639

倉橋 洋子 (KURAHASHI, Yoko)  
東海学園大学・経営学部・教授  
研究者番号：10082372

小宮 富子 (KOMIYA, Tomiko)  
岡崎女子大学・子ども教育学部・教授  
研究者番号：40205513

下内 充 (MITSURU, Shiomouchi)  
東海学院大学・人間関係学部・教授  
研究者番号：50249215